東方偉人録

kuro

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは…英雄達の知られざる伝説を記した物語である。

妖怪と人間の死闘と共存への物語……

目次

序章
全ての始まり ―――― 1

序章
全ての始まり

人間の里から少し離れた所にたつ一軒の木造建築。
それはお世辞にも人間の里の家と同じ造りとは言えなかった。
なぜならそれは…ここに住む住人というのは、日々妖怪や悪霊の類いを清める……のではなく滅ぼすことを生業として生きる職業である…
いわゆる『退魔師』と呼ばれるものだからだ。
退魔師はまず家に帰ってこない。と言ってもたった1週間ほど仕事で留守にするだけなのだが。
それ故か家にあるものも質素なもので、料理等も味を気にしない雑なものばかり食していたという。
退魔師は代々引き継がれてきて、現在は9代目となる。
9代目退魔師の名前は久國（ひさく）。
彼は幼い頃に両親を妖怪に殺され、身寄りが居なかったため、寺に預けられた。
寺で生活をして数年たった頃…12になった彼の元へ幻想郷の管理者を名乗る妖怪

が現れる。
「貴方……両親の仇を討ちたくはない？」
その言葉に久國は少し躊躇った。
そしてその答えに拒否を表したのだ。
「今はもうここの生活で十分だ。」と。
だが、現実は無情であり、時に残酷なもので…
「もっとも、貴方の答えなど興味もありませんけどね？それに……寺の連中もこの案には賛成していましたし♪」
次の瞬間久國はスキマに引きずり込まれる。
突然すぎることに彼は声にならない悲鳴を上げて、彼は寺の平和で退屈な生活から退魔師という血塗られた運命へと落ちていった。
――――――――――――――――――――――――――
それから幻想郷の管理者を名乗る妖怪こと八雲紫によって迷い家へと連れ去られた彼は、妖怪を殺すためだけに剣の修業をさせられることとなる…。
しかし、寺での鍛錬の成果あってか、彼の剣の業は日を増すたびに上達していくのだった。
そして3年の月日が流れ、彼はその身につけた剣技と寺での生活の中で奇跡的に発現

したとされる特殊的な能力を持ち、退魔師になるには十分と見なされた彼は、たった1本の刀を担がされ、人間の里の近くの森へと落とされた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……痛ぃっーの……」

急に落とされたものだから対応が出来ん。

加減ってものを知らないのか妖怪というものは……

などと毒を吐きながらゆっくりと立ち上がる。

ここは恐らく妖怪の山のふもとらへんか……ここらで留まるのはいささか不味いことになりそうだな。

等と思案していると後ろの方から物音がした。

「何者だ」

居場所は分かっているが、とりあえずは言っておく。

「ケケケケッニンゲンカァ……喰うのは何時ぶりかなぁ？」

近くの物陰からそんなことを言いながら姿を見せる妖怪。

……なるほどな、とりあえずはこいつを始末してから人里へ行けと言うことか。

「ふむ……日没まで間に合うか…？」

「何ヲイッテルノカよく分からんが…貴様はここで俺様の食事になってもらうんだ！俺

様に喰われるのを喜んで死ねぇ!!!」
等とそんな戯言を述べ、そいつは襲いかかってきた。
俺はそれを反射的に横に躱して、背中に担いだ刀の鞘に手をかける。
（こいつを人里に近寄らせるのはまずいか？ならここで……こいつを……）
「お前、不幸だったな。」
「はァ？」
不思議そうに首を傾げながら此方を見るソレに俺はこう言い放った。
「お前を今から完全に殺してやるよ。」
刃を鞘から引き抜く……バカにされたと理解し激昂したソレが再度俺へ向かってくる……
「お披露目と行こうか……
『斬撃　魍魎徹刃』！」
線を描くように軌道を描いた一筋の斬撃がその妖怪の首を切り落とした。
「ナッーーーーー?!クビを……?!」
「……っ!?」
首を斬った感覚がひどく生々しかった。
これが妖怪を斬る感覚……?!斬り心地は最悪で、調理するために肉を捌くのとはまた

違う。なにか別なブヨブヨとした生ものを骨ごと斬り落とす感覚は……?!
そしてそれを初めて味わったその日のことを俺は決して忘れることはないだろう…。
ーーー結局。
その妖怪は首を正確に落とせておらず、その首が再生するようで、その首をまた切れるほどの霊力が残っていないことを悟り、ひどく焦った俺はその場にあった岩や鈍器等で、その妖怪を何度も何度も殴りつけて無力化した後に土に埋めた。
……結果俺の体にはその妖怪の返り血やら土やらがベッタリと付着してしまった。
それからしばらく歩いたら人里には辿り着いたのだが、俺を見た村人から受けた眼差しは…心配等ではなく、今代はどうなるだとか、自分達には関わらないでほしいな…等という俺のことを遠ざけるような眼差しだった。
そうして、その村での退魔師としての継承式を終わらせ、里の守護者である上白沢慧音という女性に俺の家まで案内してもらった。
「ここがこれから君の家になる。」
「あぁ、助かる。ありがとう。」
「衣類はまた取りに来るから畳んでおいてくれ。」
「分かった。それじゃああんたも夜道には気をつけてくれ。」
「あぁ、それじゃあ。」

「……あ、なあ」
「ん？どうかしたか？」
「もしもの話さ……もしも……」
「……わかった。その時は私の所へこい。……またな。」
そうして慧音さんは里へ戻って行った。
1人家に残された俺は改めて妖怪を殺したのだと血だらけの衣類などを見て再度認識した。
（視線とか……感覚とか……とにかく色々とはやくなれないとな……）
そんなことを考えながら、俺は刀の手入れをするのだった。
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――
あの日から8年の月日が流れた。
場面は戻り、ここは里から離れた魔法の森。
今日も彼は八雲からの依頼を受け、里に危害を加える可能性のある低級妖怪を始末し終え、帰路に着いていた時のことだった。
「……？」
暗闇の中で何かがうごく音がした。すこし気になったのでその正体を探りに木々の中へと入っていく。

「おい、何かいるのか?」
先は闇に覆われており、進むことは困難とみた俺はそこで声をかけることにした。
すると少し先の方から消え入りそうな声で
「助けて……」
という声がする。
何事かと其方へ向かうとそこにはボロボロの服装で至る所に擦り傷などが付いた金髪の女がいた。
「……?!なんでこんなとこに……?おい、あんたしっかりしろ!」
俺はそう呼びかけたがその女は俺が視認できる所に来た時には既に気を失っていて、反応がなかった。
「……。しょうがねぇな…」
少し厄介だが仕方ない。里の連中に突き出すのも一つの手だが、こいつから何故こんなとこに居たのかも訪ねたいと思ったので、俺はその女を自分の家に連れ帰ることにした。
血まみれの体でこいつを担ぐのもどうかと思ったが、仕方ないか、と楽に考えてその女を米俵を担ぐようにして抱えあげる。
そしてまた来た道に戻り、里へと向かうのだった。

……しかし、彼女との出会いは俺にとって、これからの俺の運命を大きく変えるものとなるのだった。

――――――――――――――――――――――――――

～妖怪の山～

隙間から体を出して、作業中の河童に声をかける。

「調子はどうかしら?」

「ヒュイ?!……あぁ、あんたか、結構完成に近付いて来たよ。」

「それは良かったですわ。……すこし確認してもいいかしら?」

「あぁ、それは別に構わないよ。はい。」

紫は河童…河城にとりから赤い装着品を受け取る。

それは赤をベースとして中心部分には煌々と輝きを帯びた紅の球状体の物体が埋め込まれていた。

「これが……動力源の赤石……」

「あぁ、それを埋めるだけだと思ったらそれに耐えられる殻が必要なもんだからそれを作ってたのさ。まぁ、先程完成したがね。それが一応の完成版だよ。まぁ……まだまだ【試作品】には変わりないけどね。」

全く……と、にとりは一息ついて紫の方へ視線をやる。

「いきなり押しかけてきて「これをつくれ」なんて言うもんだから何の話かと思ったんだぞ？しかもよく分からん構造のものだし……なんだってこんなものなんだ…迷彩服の方が幾分もましだね。」

紫は少し微笑を浮かべながらにとりにこう返す。

「でも私はあなたに…河童の技術力には期待してたんですわよ？それにあなたもしっかりとその役目を果たしてくれましたし…感謝していますわ。」

「へいへい、ありがとさん。それで？そろそろ教えてくれてもいいんじゃないのかい？」

「？」

紫はわざとらしく首を傾げる。それをみてにとりは苦笑いしながらこう言った。

「だから、なんでこんな大掛かりな装置の作成を依頼に来たのかというその理由だよ。これに携わった妖怪の数が多すぎるんだよ。これはなんなんだい?!こんな大量の妖怪のデータを収集しないとダメなのかい？これは幻想郷の有力な妖怪の鬼、天狗、それにこれの大技は、その人間の霊力に依存する！

それでいてこれの動力源は人の生命力だ。つまりこの装置は人間専用……！

私は教えて欲しいかな？あんたは人間が使う人間を殺す装置を盟友達に使わせるのかい？これは妖怪に対抗するために作られた人間を殺す装置と言っても過言ではないぞ…」

紫は面倒くさそうにして

「その質問は今は答えませんわ。それでもあなたの言う【人間を殺す装置】と言う点では間違っていないわ。だってあれは博麗の巫女の対の存在である退魔師のために作った…人里の……人間の戦力を拡大するために作ったものですから。」

それを聞いたにとりは納得したのかそのまま次の質問を紫に訪ねる。

「それで?このデータは収集してるんだよね?」

「え?何言ってますの?」

「え?」

紫はニコリと笑って

「そんなもの更新よ更新。これから一緒に行くに決まってるでしょ?ほらすぐ準備しなさい。旧地獄の鬼、山の天狗、人里の守護者……これらからデータを取らないといけないのですからね?」

「えぇ……ちょっ…?!やめ……」

紫はそのままにとりの返答を聞くこともせず、にとりを自身の隙間に放り込んだ。

そうして…

「それで……あの妖怪についてはまた今度でもいいとして……。まぁ、これからしなければならないことをさっさとやってしまって、はやく完成させないといけないですわ

ね。」……そう呟いて、そのまま自身の隙間に入り込み、妖怪の山にいる天狗の元へと向かうのだった。